



日本の詩歌

26 近代詩集

中公文庫

中公文庫

日本の詩歌

26

近代詩集

中央公論社

中公文庫

©1976

日本の詩歌 26

近代詩集

昭和五十一年五月十日初版
昭和五十六年六月三十日三版

発行者 高梨 茂

用紙 三菱製紙
整版印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七
振替東京二一三四

定価 六八〇円

目次

北村透谷	11
国木田独歩	15
伊良子清白	19
河井醉茗	24
横瀬夜雨	30
岩野泡鳴	34
川路柳虹	38
武者小路実篤	46
中川一政	51

高橋元吉
中 勘 助
白鳥省吾
福田正夫
野口雨情
三富朽葉
北村初雄
大手拓次
生田春月
佐藤 清
前田鉄之助

128 123 117 99 91 83 79 75 67 62 56

大木惇夫
竹内勝太郎
平戸廉吉
萩原恭次郎
壺井繁治
岡本潤
大鹿卓
小熊秀雄
城左門
岩佐東一郎
笹沢美明

岡崎清一郎
黄 瀛
佐藤一英
石川善助
森山 啓
尾形亀之助
逸見猶吉
坂本 遼
菊岡久利
永瀬清子
神保光太郎

289 283 278 273 268 261 255 250 245 241 233

菱山修三
岡田刀水士
安藤一郎
山中散生
近藤 東
富永太郎
野長瀬正夫
野田宇太郎
大木 実
平木二六
片山敏彦

串田孫一
藤原定
緒方昇
更科源藏
真壁仁
田木繁
淵上毛錢
杉山平一
小高根二郎
木下夕爾

解説

鑑賞

日本近代詩史年表
I

伊藤信吉

伊藤信吉

村野四郎

近代詩集

北村透谷

蝶のゆくへ

舞うてゆくへを問ひたまふ、

心のほどぞうれしけれ、

秋の野面のづらをそこはかと、

尋ねて迷ふ蝶てふが身を。

行くもかへるも同じ関、

越え来し方に越えて行く。

花の野山に舞ひし身は、

花なき野辺も元の宿。

前もなければ後もまた、

北村透谷きたむらとうこく (1868～94) 本名門太

郎。神奈川県小田原に生れる。東京専門学校に学ぶ。少年時に自由民権運動に投じ、キリスト教信者として伝道に従ったこともある。長詩『楚囚之詩』、劇詩『蓬萊曲』のほか、没後『透谷全集』(昭和二十五年)が刊行された。二十六歳の年に自殺、その情熱的な短い生涯を終った。

「蝶のゆくへ」「眠れる蝶」北村透谷が亡くなって五か月ほど後に刊行された『透谷集』(明治二十七年刊)には、評論その他と共に抒情詩九篇が収めてあり、「蝶のゆくへ」「眠れる蝶」は連作のような形になっている。

『透谷集』にはこのほか「雙蝶のわかれ」という作品もあり、蝶三篇をつらねたところに、脆さ、はかなさ、弱さによる美の情感が語

「運命」の外には「我」もなし。

ひら／＼／＼と舞ひ行くは、

夢とまことの中間なり。

眠れる蝶

けさ立ちそめし秋風に、

「自然」のいろはかはりけり。

高梢に蟬の声細く、

茂草に虫の歌悲し。

林には、

鶉のこゑさへうらがれて、

野面には、

千草の花もうれひけり。

あはれ、あはれ、蝶一羽。

られ、標題そのものが生命の衰えを感じさせる。

「蝶のゆくへ」の主題は、終りの方の「『運命』の外には『我』もなし」の一行にある。さらにまた舞い行く先は「夢とまことの中間なり」という一行にある。人はいかにしても運命の手からのがれることはできないものか。運命は人の生涯をとらえて放さぬものか。北村透谷は一面で情熱の人であり、行動の人だったが、同時にまたいち早く近代人の内的世界にただよう憂愁の心理を知った。情熱と沈静。「蝶のゆくへ」はその内的な沈静から生れ、抒情の弱々しさにおいて死の予兆を思わせる。

その終末的な抒情は「眠れる蝶」において、ついに滅びの抒情になった。終りの「只だ此まゝに『寂』として／花もろともに滅えばやな」という言葉は、北村透谷の詩的情操を語ると共に、自殺に

破れし花に眠れるよ。

早やも来ぬ、早やも来ぬ秋、

万物秋となりにつれ。

蟻はおどろきて穴索め、

蛇はうなづきて洞に入る。

田つくりは、

あしたの星に稲を刈り、

山樵は

月に嘯むきて冬に備ふ。

蝶よ、いましのみ、蝶よ、

破れし花に眠るはいかに。

破れし花も宿仮れば、

運命のそなへし床なるを。

春のはじめに迷ひ出で、

追いつめられるにいたった運命的な滅びの意識を語るものである。

北村透谷は未完成に終った詩人であり、未完の課題を背負ったまま挫折し、みずからいのちを断った詩人である。

明治二十六年一月創刊された雑誌『文学界』は、星野天知、平田秃木、戸川秋骨、馬場孤蝶、島崎藤村らを同人とし、近代文学における最初のロマンチズムの運動ということが出来るが、その指導的位置にあったのは北村透谷である。したがって北村透谷についていう「詩・詩人・詩精神」は単に詩作者ということだけでなく、近代の精神の発現とそれにもとづく詩・評論、その他の業績いっさいを包括し、時代の文芸思潮を先導するものであった。その意味で「厭世詩家と女性」「人生に相渉る」とは何の謂ぞ」などの評論は詩論

秋の今日まで酔ひ酔ひて、

あしたには、

千よろづの花の露に厭き、

ゆうべには、

夢なき夢の数を経ぬ。

只だ此まゝに「寂」として

花もろともに滅えばやな。

であり、文学論であり、人生論であり、文明論であることにおいて、注目すべき業績であった。島崎藤村はその精神を受け継いだ詩人・作家として、北村透谷について次のように言っている。

「動揺した精神——と露西亞の小説家が言った言葉は、北村君のことに宛てはまるだろう。友人と一緒に酒を飲みながら沙翁の戯曲を評したり、夜を徹して当時の文学を論じたりするかと思うと、翌日は宗教の伝道に出懸ける、まあそういうやり方だった。『世界に対する観念』などを見ても解るが、ああいう深刻な宗教思想と、一方には『精神の自由』とか『情熱』とかに見えるような奔放自恣な感情とこの二つが絶えず心に戦っていたようである。詩人であると同時に思索家である。』（北村透谷君）

（伊藤信吉）